



学校だより



2月号

令和7年(2025年)
1月31日(金)

横浜市立洋光台第二小学校

よりそう

副校長 佐藤 朋実

少し改まった気持ちで年初の抱負など考えた年明けから、あっという間に一か月が過ぎようとしています。心配されたインフルエンザ等の感染症もおかげさまで大きな流行とならずに過ごすことができており、引き続き油断せずに感染防止対策を心がけていきたいと思っております。

今年の1月は、例年以上に大地震の被害とその後の暮らしについて、さまざまな視点から多くの報道があったように感じます。「能登半島地震」からちょうど1年、そして「阪神・淡路大震災」から30年という時機をとらえてのことで一種の感慨も覚えつつ、いくつかの記事に読み入りました。

私が子どものころから長らく「防災の日」と言えば9月1日、関東大震災の起きた日でした。関連する報道が増えたり、大規模な避難訓練が行われたり、防ぎようのない天災への恐れや自分なりにできる備えなどを否が応でも考えさせられる機会になっていたように思います。とはいえ、やはりこの震災そのものは過去の災害で、写真や証言は残されているものの日常生活自体が現在とはかなり違うので、被害や復興の実情、実際に暮らしていた人たちの様子や思いなど、なかなか分かりにくいところがありました。

しかし、自分たちの生きている同時代に起きた災害については、それぞれの経験や関心に応じた記憶が残っているのではないかと思います。(個人的には、子どものときに実際に学校で揺れを感じて、初めて訓練と同じように避難した地震のことをよく覚えています。)
「阪神・淡路大震災」では、早朝に自宅で感じた地震が思いもよらない場所での大きな地震だったと驚いたことと「災害ボランティア」の活躍が記憶に強く残っています。大地震という災害場面にボランティアが入れるということや多くのニーズがあることに、始めは少し意外な思いがありました。しかし、実際に勤務校で同僚が連休などにボランティアに行ったという話を聞いたり、活動の様子をニュースなどで知ったりするなかで、被災された方からもボランティアの方からも「元気や力をもらった」というお話があり、人と人とのつながりや誰かのために行動することのもつ力を改めて感じました。その後、震災のあった1月17日は「防災とボランティアの日」に制定されています。

「阪神・淡路大震災」の今年の追悼のつどいでは、灯籠で「よりそう」という言葉がつけられました。遺族代表の方が「今年の灯籠の文字『よりそう』のように、被災者の気持ちに寄り添い、話を聞くことで、災害を『自分事として捉える』こと。そして『今自分にできることは何か』を考える、つまりは『防災・減災のスタートラインに立つ』ということが大切だと思います。」と述べられていたと新聞で読みました。「よりそう」の意味は辞書的には「もたれかかるようにそばに寄り」「相手を思いやり支える」となりますが、そこからもう一歩、自分に引き寄せることが真に「よりそう」ことにつながるのではないかと思います。

2月2日(日)に、本校地域防災拠点の避難所開設訓練が予定されています。避難時の様子的一端を知る機会になるのではないのでしょうか。

洋光台第二小学校ホームページ『校長室の窓』では、子どもたちや学校の様子を発信しております。
<https://www.edu.city.yokohama.lg.jp/school/es/yokodai2/index.cfm/1,0,68,html>

